



和歌山県林業試験場の最新情報

「やまびこ通信」



■ 林業試験場成果発表会に参加のお礼

2月14日(木)に上富田文化会館において成果発表会を開催したところ、80名を超える皆様のご参加をいただき、誠にありがとうございました。

口頭発表は5つの課題とし、その他の成果についてはポスター発表(研究資料等展示)として、出来るだけわかりやすく身近なものになればと思い、聴いて・見て・触って・味わっていただけるような開催内容にしました。会場では研究員に対して熱心に質問や内容を確認される光景も多く見られ、研究成果が少しでも皆様のお役に立てば幸いですと感じたところです。今後とも一層工夫を凝らした発表会にしたいと考えています。



今回発行の第8号では、改めて発表会の開催内容と、最新の話題を皆様にお届けさせていただきます。

本年度もあと僅かとなりました。これまでのご協力に感謝申し上げますとともに、当試験場が更に皆様に親しまれ頼りにしていただけるよう一層努力して参りますので、今後ともご支援とご協力をお願いいたします。(場長 田上 耕司)

<口頭発表>要約

○「ウバメガシ萌芽枝のニホンジカ食害状況とその対応」

経営環境部 研究員 濱田さつき

近年、ウバメガシはニホンジカ(以下、シカ)の食害によって、萌芽による更新が困難になってきている。このような状況の中、低コストで、森林所有者や製炭者が容易に施工



シカの嗜好性試験の状況

できる方法で萌芽更新を可能にすることを目的とし、メタルラスやウバメガシ枝積みをも単木的に伐採株に設置し、シカ食害防除効果を調査した。

その結果、メタルラスでは、一定期間損壊することなく伐採株を防護できるが、資材費がかかること、一方、ウバメガシ枝積みでは資材費はほとんどかからないが、風などの影響で損壊してしまうケースが

多いことが分かった。

また、択伐(ウバメガシ株から必要な幹だけを抜き伐りする伐採方法)施業の効果についての検証では、シカ高密度生息地域でも伐採株の枯死を回避できることが分かった。

○「森林防護柵沿いにおけるニホンジカ誘導捕獲技術の開発」

経営環境部 主任研究員 日下昭宏

ニホンジカ(以下:シカ)は、本県の主要な農林業生産物への加害獣であり、一層の捕獲が望まれている。造林地の森林防護柵(以下:柵)外沿いで、餌による誘引と倒木等を使った誘導を行うくくりワナでの捕獲技術の開発に取り組んだ。



くくりワナで捕獲したシカ

造林地の柵外沿いでシカの出没状況を調査し、餌によって出没回数が概ね増加することがわかった。

倒木をコの字型に設置し、くくりワナの回りを石で覆い、くくりワナの上に足を置いた場合のみ、餌が食べられるようにした。2箇所で、餌付けによる馴化と、くくりワナによる捕獲を行った結果、13頭のシカを捕獲することができた。

本手法は、高度な捕獲技術や経験を必要とせず、通常のくくりワナに比べ、2倍以上の捕獲効率となった。

林業試験場のホームページにマニュアルを掲載していますのでご利用ください。

○「シイ材(コジイ)の利用拡大に向けた乾燥試験」

木材利用部 主査研究員 岡本憲治

シイ材は豊富な資源量があるが、乾燥技術が確立されていないため、用材としてほとんど利用されていない。しかし、材質は硬木で傷つきにくく、フローリング材として高いニーズが期待できるため、シイのフローリング材への利用を目的とした乾燥技術の開発に取り組んだ。



シイ材の乾燥状況

木材乾燥スケジュール簡易決定法(100℃試験)により人工乾燥スケジュールを推定し、人工乾燥試

験を行った結果、含水率8%に達するまでの乾燥日数は32日を要した。

天然乾燥試験では含水率20%に達するまで85日を要した。その後、仕上げ人工乾燥試験を行い、含水率8%に達するまで12日を要した。

乾燥材の品質や歩留まりへの影響を考慮すると、天然乾燥と人工乾燥を組み合わせることが適当と考えられた。

○「サカキを加害する新たなヨコバイの生態と防除」

特用林産部 主任研究員 坂本 淳

本県産サカキは、日本一の生産量を誇る。しかし、平成14年頃からサカキの成葉に原因不明の白点が発生する被害が確認され始め、近年、被害は県内全域に及び産地の維持が懸念されている。



加害主の新たなヨコバイ

原因は、オビヒメヨコバイ族の新属新種の吸汁によることが確認された。生態等の解明及び防除対策の確立に向け、加害特性を明らかにするために硬化前の新葉と2年葉の嗜好性試験及び防除に向け昨年度はNI-31剤(成分：アセタミプリド)の薬剤効果が確認されたため、新たに乳剤(2種類)の薬剤試験を行った。

結果、新葉の方が嗜好性は低いと考えられ、薬剤については両薬剤とも防除効果があることが確認された。

○「イタドリ優良系統の選抜と増殖」

特用林産部 主査研究員 杉本 小夜

イタドリは近年、栽培や新たな商品開発に取り組む地域が増加している郷土山菜である。より効率的な栽培に繋げるため、優良系統の選抜を目的に県内で収集し



培養中のイタドリ

たイタドリの系統別特性について調査するとともに、組織培養による増殖に取り組んだ。

その結果、若芽の発生時期、収量および皮の剥きやすさ等は系統により異なる傾向が見られた。今後調査を継続し、多収で加工に適するなど優良系統を選抜する。

組織培養による増殖については、1回の継代培養で5.5~5.7倍の増殖率となり、順化(植物を培養容器から出して、器外の環境に慣らす行程)1ヶ月後の発根率は90~100%と良好であった。

今後より低コストで行える培養、順化方法を検討する。

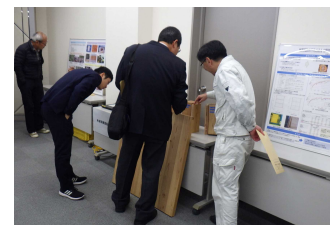
＜ポスター発表＞

口頭発表以外にも各研究員が取り組んでいる研究成果をポスター等にまとめ、展示するコーナーを設け、来場者からの質問等に対応をいたしました。

各部とも解りやすく研究成果をご理解頂けるよう、工夫を凝らした発表に努めました。

特に、現物資料の展示は好評で、紀州材構造用床パネルやシカ捕獲用くくり罠、少花粉スギのコンテナ苗、サカキ等花木の病害虫、イタドリの組織培養、ブドウハゼや木蠟、和蠟燭等、見て・触って頂くことで研究成果を身近なものとして実感して頂けたと思います。

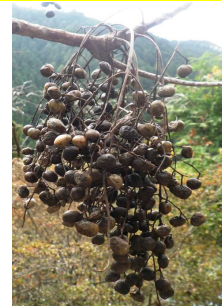
また、日高川町イタドリ部会の協力で、研究開発中の「イタドリ花茶」の試飲もして頂き、会場は終始、活気あふれる雰囲気になりました。



★ 最近のトピックス ★

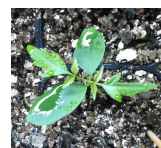
葡萄ハゼ・木蠟産業の復活へ向けた研究をスタート！

かつて、和蠟燭や鬢付け油の原料として、本県の地場産業を支えたブドウハゼ。製蠟された「木蠟」は近年、天然素材のJapan Waxとして見直され、口紅やクリームなど化粧品原料としての需要が増え、主産地の九州地方では欧米へ輸出するほどの産業として復活しています。



ブドウハゼの実

ブドウハゼ発祥の地、紀美野町では原木とされる木の生存が確認され、全国ニュースにもなり注目されました。地域では、最優良品種のブドウハゼの栽培を復活させ、新たな産業として再興させる取り組みが始まっています。



発芽促進試験



接ぎ木試験

当試験場でも地域ニーズにこたえるため、「接ぎ木」や収穫しやすい「低木仕立て」技術の開発などの研究をスタートさせました。(特用林産部 坂口)

編集・発行 和歌山県林業試験場

〒649-2103 西牟婁郡上富田町生馬1504-1

TEL : 0739-47-2468 FAX : 0739-47-4116

※『やまびこ通信』は「和歌山県林業試験場のホームページ」にもアップしています。